USで経過を追えたセフトリアキソンによる偽胆石症の1例

◎花田 理子[1)]、高橋 智子[1)]、齊藤 薫[1)]、板垣 史代[1)]、岡部 美恵[1)]
社団法人 北海道勤労者医療協会 勤医協札幌病院[1)]

【はじめに】セフトリアキソン(以下CTRX)とは呼吸器感染症や消化器感染症など、多くの細菌感染症の際に使用される抗生物質である。副作用として偽胆石症が知られており、まれに腹痛や吐気などの症状をきたす。今回CTRX投与による偽胆石症の経過をUSにより追うことができたので報告する。【症例】90歳代男性。既往歴は心筋梗塞・右上葉肺癌・高血圧・慢性腎臓病。発熱と倦怠感を訴え当院受診。胸部CT検査で胸水と右肺上葉に気腫性変化を伴う陰影を指摘され、右上葉肺炎疑いで入院加療となった。同日施行されたUSでは右胸水を指摘した。【経過】肺炎治療のためCTRX（2g/day）点滴静注を開始。投与開始から８日目の血液検査で肝機能異常を認めた。投与開始から10日目、薬剤性肝障害疑いでUS施行。胆嚢内に音響陰影を伴うdebrisと拡張した胆嚢管内に結石２個を指摘した。入院前のUSでは胆嚢・総胆管には所見が無かったため、CTRX投与に伴う偽胆石症による肝障害と診断された。その後腹痛の症状が出現したため、他剤内服に変更。偽胆石症については血液データ・ USでの経過観察となった。CTRX投与中止後6日目のUSでは、胆嚢・総胆管・総肝管にdebrisを指摘。中止後12日目には、胆嚢・総胆管中～下部にdebrisはあるものの、総肝管のdebrisは消失。中止後19日目には、胆嚢・総胆管下部にdebrisは少量あるが、全体的に改善傾向を示し、血液データについても肝機能は徐々に改善が確認された。その後、転院でフォローは終了。【考察】本症例は当初腹痛などの症状に乏しく、定期の血液検査で肝機能障害が指摘され、スクリーニングUSの所見によって診断に至ったものである。また、その後の経過も経時的にUSで観察することができた。CTRXによる偽胆石症の多くは、薬剤中止により自然消失するとされているが、まれに急性胆嚢炎や急性膵炎などの合併症が生じることがある。合併症が現れた場合には、手術を含めて通常の胆石症同様に適切な処置が必要となるため、血液検査やUS等の画像検査での経過観察が重要となる。
【まとめ】侵襲性なく簡便に施行できるUSが、偽胆石症の診断および経過観察に有用であった。

連絡先：011-820-1656